

日付:2016年1月24日／聖書:ヨハネによる福音書6:1～15

説教:「“命のパン”とは何か」

イエスは、あとを追ってくる群衆に何が必要とされているのかと弟子を試みる。フィリポに対しイエスは問う。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と。フィリポは「二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。二百デナリオンとは数百万になる相当な額。実際に二百デナリオンでパンを買えば十分に足りる額ではある。でも、「二百デナリオン分のパンでは足りない」と答えたのは、群衆に対する本来の飢え渴きは、そんなもので満たされるものではないと感じ取ったということかと思う。イエスは大勢の群衆を見て命のパンの出来事へと進む。マルコ福音書では、この時の群衆は「飼い主のいない羊のような有様」(マルコ6:34)と記され、群衆への「憐れみ」として見つめるイエスを描く。その群衆は、この世の社会情勢の中で国家権力に不自由を強いられ、抑圧の中で生きざるを得ない状況に立たされていた人々。その現状の中で真の王を求めて、イエスのあとを追う群衆であった。

沖繩の置かれた現状も、国家権力に翻弄され、軍事基地を押し付けられ、人権が軽視され続け、人間としての尊厳が蔑(ないがし)ろにされ続けている。沖繩の詩人仲里友豪作「ボク零歳・黒焦げんぼ」がある。

…カラダト黒イ目ノ形ニナツテ／ボク食ベラレタクアリマセン／食卓ニ黒イカタマリガアレバ／ソレハボク／ボクニハ権利ガアリマス／アナタノ食卓ニイツマデモ／居続ケル／黒

この詩は、1962年12月20日に起きた米軍機の墜落事故で亡くなった生後2か月の男の子がその事故の犠牲者になったことを歌っているもの。この詩は、沖繩の米軍基地や米兵がらみの事件、事故によってむごたらしい死に追いやられた死者たちを呼び入れながら、ボクにも生きる権利がある、生きた証がある、生きていた2か月の時がある。忘れないで。そういうメッセージが込められている。私たちは、その声に、時代に、歴史に、現状に見ないふりはしていけない。イエスが「目を上げて」見たのは、そういう群衆を見ておられたのだ。

先週、「辺野古ゴスペル」が行われた。時より小雨がぱらつく寒い中、既に座り込みを排除する機動隊のごぼう抜きが行われ、大型車両がゲート内に入っていく。再び、ゲート前に座り込みをはじめると、「今日はゴスペルの皆さんが来ています」との声がかかり、思いっきりゴスペルを歌った。歌う皆さんの目に涙が浮かんでいた。讃美歌をクリスチャンうんぬん関係なく、僧侶の方も配った歌詞を見て歌っている。新基地を造らせない、これ以上、軍事基地化への沖繩は許さない。沖繩の声に、時代に、歴史に、現状に向き合う人々がここにいる。「命のパン」を分かち合う人々がここにいる。(神谷)